4 月 30 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　6：　34 – 40

「命のパン」

「人はパンだけで生きるものではない」(ルカによる福音書 4:4)とは言われるものの、やはり「腹が減っては戦ができぬ」のもまた現実です。

17 歳以下の子どもの相対的貧困率(生活状況が自分の所属する社会の大多数よりも、相対的に貧しい状態にある人の割合)は、13.5%(2018 年、厚生労働省調べ)。新型コロナウイルス禍でさらに拡大していると思われます。

現実に「食べられない」人たちを前に、無力感に襲われることもあるでしょう。「子ども食堂」や「フードバンク」などによって救われる命がある一方で、根本的な解決を図る必要性も感じます。しかし、どうすれば……堂々巡りが続きます。

「主はモーセに言われた。『見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。』」(出エジプト記 16:4)

本当に天からパンが降ってきたら良いのに、と願うこともあります。誰もが十分に飲み食いして、さらに余るほどあれば、救われる人はもっと多くなるだろう、と。

もちろん、それによってまた「自分さえ良ければ」という気持ちが刺激されてしまうのもまた現実です。「毎日降るのだから、一日分ずつ集めなさい」(「主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」出エジプト記 16:16)と言われても、人はつい二日分、三日分を抱え込もうとしてしまいます。神はそのような人間の試みを砕かれますが(「彼らはモーセに聞き従わず、何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなったので、モーセは彼らに向かって怒った。」出エジプト記 16:20)、民を見捨ててマナを与えないとはされません。(「しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め／憤りを尽くされることはなかった。」詩編 78:38)

それぞれが気づくことを重視されたのです。自分たちを生かしているものは何なのか。誰が私たちの存在を肯定し、保証しているのか。自分を根本から支える軸は何なのか、知ってほしいと願われています(「わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」コリントの信徒への手紙一 8:6)。

「イエスは言われた。『わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。』」(ヨハネによる福音書 6:35)

イエスに従ったとしても、物理的に満腹になるわけではありません。同時に、イエスの存在が空腹をごまかすものでもありません。しかし、イエスに従う一人ひとりが「自分さえ良ければ」から脱して、隣人を自分のように愛したとき、「何か」が変わるのです。

一人だけでは何もできないと思えますが、一人、また一人と増えていき、社会全体を包み込んで広がっていく。そんな希望を抱きます。

自分にできることは何かと問いながら生きる。良いときもそうでないときも、いつも私を養い続けてくださるイエスを感じながら、自分にできる精一杯をやり続けていく。

今も昔も、隣人のために様々な活動をしておられる方々は、きっとその思いに動かされているのでしょう。私たちも命のパンをいただきながら、後に続く一人となりたいのです。